



# この一冊

Vol. 96



会員 澤井 英久 (27期) ●Hidehisa Sawai

向田邦子の随筆集である(昭和53年10月刊行)。向田邦子はテレビドラマ「寺内貫太郎一家」の脚本家として名を上げ、直木賞も受賞した作家であるが、51歳という若さで台湾旅行中の飛行機事故により亡くなった。この随筆集の表題となったのが「父の詫び状」というエッセイである。

「父の詫び状」は、到来物の伊勢海老を放したところ玄関の三和土を汚したのでそれを片付けるという描写から始まり、子どもの頃の家の玄関での思い出を綴っていく。ある冬の寒い朝、当時父が保険会社の仙台支店長を務めていたことから、保険の外交員を自宅に招いて酒宴を開き、著者が、酔った外交員が粗相した大量の吐瀉物を母に代わり片付けた。著者は、「保険会社の支店長というのは、その家族というのは、こんなことまでしなくては暮らしてゆけないのか。黙って耐えている母にも、させている父にも腹が立った。」と記述している。著者が敷居につまった大量の吐瀉物を爪楊枝で掘っているのを父が見ていたが、全くねぎらいの言葉もかけてこなかった。

3、4日して著者は、東京へ帰ることになった。当時著者は東京の祖母の家から学校に通っており、夏冬の休みだけ仙台の両親の許へ帰っていた

## 『父の詫び状』



向田 邦子 著  
文春文庫 刊  
572円(税込)

のである。祖母の家へ帰ると、父からの手紙が来ていると告げられた。巻紙に筆で、いつもより改まった文面でしっかり勉強するようにと書いてあり、終わりの方に、「此の度は格別の御働き」という一行があって、そこだけ朱筆で傍線が引かれてあった。それが父の詫び状であった。

著者の父は、子ども時代から大変な苦労人で、高等小学校卒業の学力で下働きから入社して保険会社の取締役にまでなり、異例の出世を遂げた人である。この随筆集の中では、頑迷で家族に威張り散らす父である。しかし、著者の父を見る目は優しい。

祖母が亡くなり、その通夜に思いがけなく父の会社の社長が弔問に訪れた(父はまだ課長)。「父は客を蹴散らすように玄関へ飛んで行き、社長

にお辞儀をした。それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。」。続けて、著者は言う。「私は父の暴君振りを嫌だと思っていた。この姿をみて異例の出世をした理由を見たように思った。肝心の葬式の悲しみはどこかにけし飛んで父のお辞儀の姿だけが目に残った。私達に見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。」(「お辞儀」本随筆集所収)。

著者に「ゆでたまご」というエッセイがある。小学校4年生の時、クラスに足の悪い、性格もひねくっていた子がいた。運動会の徒競走でその子が途中で走るのを止めようとした時、学校で一番人気のない先生が突如飛び出し、女の子に併走して女の子は無事ゴールに着き、校長から賞品をもらおうという話である。

著者は言う。「私にとって愛はぬくもりです。小さな勇気であり、やむにやまれぬ自然の衝動です。『神は細部に宿りたもう』という言葉があると聞きましたが、私にとっての愛のイメージは、このとおり『小さな部分』なのです。」。

私も著者のように、スポットライトを浴びることのない人々の、絶えることのない人生を見つめていきたい。 N  
扉